

五五 十如是事

正嘉二年 三十七歳御作 四一〇頁

我が身が三身即一の本覺の如来にてありける事を今經に説い

て云く如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・

如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等文、初めに如是相とは

我が身の色形に顯れたる相を云うなり是を心身如来とも又は

解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云

うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、

三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道と

も法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来と

は云いうなり此の三如是さんによぜが三身如来さんじんによらいにて・おはしましけるを・よそ

に思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知り

ぬるを法華經ほけきようをさとれる人とは申もうすなり此の三如是さんによぜを本ほんとして

是これよりのこりの七つの如是によぜはいでて十如是じゆのぜとは成りたるなり、

此じゆのぜの十如是じゆのぜが百界はちまんほうぞうにも千如さんぜんせけんにも三千世間さんぜんせけんにも成りたるなり、かく

の如ごとく多くの法門ほうもんと成りて八万法蔵はちまんほうぞうと云いはるれどもすべて只ただ一

つの三諦さんたいの法ほうにて三諦さんたいより外ほかには法門ほうもんなき事なり、其そのの故ゆえは百

界かいと云いうは仮諦けたいなり千如せんと云いうは空諦くうたいなり三千さんぜんと云いうは中諦ちゆうたいな

り空と仮と中とを三諦さんたいと云いう事なれば百界ひやつかい・せんによ・千如さんぜんせけん・三千世間さんぜんせけんまで

多くの法門ほうもんと成りたりと云いへども唯ただ一つの三諦さんたいにてある事なり、

されば始はじめの三如是さんによぜの三諦さんたいと終おわりの七如是しちによぜの三諦さんたいとは唯ただ一つの

三諦さんたいにて始はじめと終おわりと我が一身いつしんの中の理うちにて唯ただ一物いちもつにて
不可思議ふかしぎなりければ本ほんと末まつとは究竟くきようして等ひとしとは説とき給たまへるな
り、是これを如是によぜ本末究竟等ほんまつくきようとうとは申もうしたるなり、始はじめの三如是さんによぜを本ほんと
し終おわりの七如是しちによぜを末まつとして十の如是によぜにてあるは我が身うちの中の三諦さんたい
にてあるなり、此さんたいの三諦さんじんによらいを三身如来さんじんによらいとも云いへば我が心身ほかより外
には善惡ぜんなくに付けてかみすぢ計ばかりの法ほもなき物をされば我が身が
頓やがて三身即一さんじんそくいっの本覺ほんがくの如来によらいにてはありける事これなり、是をよそに
思しゆじよううを衆生まよとも迷まよいとも凡夫ぼんぷとも云いうなり、是これを我が身の上と
知りぬるを如来にょらいとも覺さとりとも聖人しょうにんとも智者ちしやとも云いうなり、かう解
り明あきらかに觀やがずれば此の身頓やがて今生こんじようの中うちに本覺ほんがくの如来によらいを顯あらはし
て即身成仏そくしんじようぶつとはいはるるなり、譬たとえば春夏しゆんか・田植を作りうへつれ

ば秋冬は蔵に収めて心のままに用うるが如し春より秋をまつ程は久しき様なれども一年の内に待ち得るが如く此の覺に入つて仏を顯はす程は久しき様なれども一生の内に顯はして我が身が三身即一の仏となりぬるなり。

此の道に入ぬる人にも上中下の三根はあれども同じく一生の内に顯はすなり、上根の人は聞く所にて覺を極めて顯はす、中根の人は若は一日・若は一月・若は一年に顯はすなり、下根の人はのびゆく所なくてつまりぬれば一生の内に限りたる事なれば臨終の時に至りて諸のみえつる夢も覺てうつつたなりぬるが如く只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあつと形もなくなりて本覺のうつつの覺にかへりて法界をみれば皆

じゃつこう じくらく ひじろいやし
寂光の極樂にて日来賤と思ひし我が此の身が三身即一の本覺
によらい
の如来にてあるべきなり、秋のいねには早と中と晩との三のい
あ
ね有れども一年が内に収むるが如く、此れも上中下の差別ある
おさ
人なれども同じく一生の内に諸仏如来と一体不二に思い合せてあ
しよぶつによらい
いつたいふじ
るべき事なり。

みようほうれんげきよう

たい

妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは何様なる体にて・お

いかよう

たい

はしますぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてあ

たず

いだ

しんしょう

はちよう

びやくれんげ

たいしょう

みようほうれんげきよう

もう

りける事なり、されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しけ

る事なれば經の名にてはあらずして・はや我が身の体にてあり

たい

けると知りぬれば我が身頓て法華經にて法華經は我が身の体を

やが

ほけきよう

ほけきよう

たい

よび顯し給いける仏の御言にてこそありければやがて我が身

あらわ

たま

みことば

さんじんそくいつ

ほんがく

によらい

さとり

むし

三身即一の本覺の如来にてあるものなり、かく覺ぬれば無始よ

このかた

もつそつ

り已来今まで思いならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思い

ごと

これ

いっぺん

やるが如く・あとかたもなく成りぬる事なり、是を信じて一遍

なむみょうほうれんげきよう

ほけきよう

さとり

によほう

も南無妙法蓮華經と申せば法華經を覺て如法に一部をよみ

たてまつ

じっぺん

奉るにてあるなり、十遍は十部・百遍は百部・千遍は千部を

たてまつ

如法によみ奉るにてあるべきなり、かく信ずるを如説修行の

もう

なむみょうほうれんげきよう

人とは申すなり、南無妙法蓮華經。